

「田中等彫刻公園」をつくろう

園長 児嶋 草次郎

宮崎は6月1日に梅雨に入り、雨間にその地に立ってみました。そこは、まさに縄文の森でした。榎（かし）の木、椎の木、欒（くぬぎ）の木、それに樟木（くすのき）等の大木に完全に被われ、低木の犬ビワはもう実をつけていました。遠くではヒヨドリやホトトギスが鳴き、地の底では虫たちがメスを求めて競い合って奏でています。落ち葉や草の匂いも薄暗い湿気の中で、腐葉土に近いものです。

何千年か以前から、この地には、縄文人が住んでいました。近くの泉から土器や石器が出て来たこともあるし、学校の行き帰り、畑の縁でよくヤジリを拾いました。今、石井記念友愛社の研修館には、完全に復元された逆円錐形の煮炊きをする土器を飾っています。これもこの茶臼原で出たものです。少し時代が下るのかもしれませんが、この茶臼という名前は日本各地にあります。アイヌ語では「とりで」という意味。時を越えてその妖気が漂っています。

彫刻家の田中等氏が高鍋の町からのがれて、この森の中で彫刻を作るようになって、もうかなりの年月が経ちます。石を切ったり刻んだりする時には、かなりの音が出るので、町中では制作ができなくなって来たのです。最初は、私はただその場を提供するという意味だけしか考えませんでした。ところが、芸術は、その場所の空気こそが、その作品の世界を形づくっていくのだということに気付かされて来ています。

石井十次時代以降、その森を「アンジェラスの森」と呼ぶようになっていきます。今、方舟館に吊り下げられているアンジェラスの鐘は、最初の頃は、森の下に吊り下げられ、朝夕鳴らして、この茶臼原に独立した卒院生たちに時を知らせていたのです。

田中氏の作風は、この森で作るようになり、角が取れて優しい雰囲気となっていきました。女性的な包容力みたいなものも感じさせられるようになり、私は冗談で、石井十次の魂の一部が乗り移ったのじゃないのと言ったりしました。

田中氏は、私の高校時代、3年間同級生でした。私は中学校時代に何となく絵描きになりたいという夢を持っていて、高校に入って美術部に入部してみると、そこに田中君もいました。デッサンも確かだし、私など開拓地に育った田舎者からすると、はるかに先を走っていて、いっぺんに私の夢は萎えてしまい、美術部も中退してしまいました。それ以来、ずっと彫刻家として芸術の道を究めようとしている彼の人生を、羨望と尊敬のまなざしで見つめ続けて来ています。

互いに人生終盤に近付いていますが、やはり、彼の育った高鍋の歴史・文化・風土が田中等という芸術家の世界の基盤を形づくったのだらうと感じるし、この歴史・文化・風土を明確にして次の世代に伝えていくことが、私に残された使命であると考えてるようになっていきます。

話を田中等彫刻の作風にもどします。石井十次の世界を飛び越えて、グングン日本人の魂をさかのぼっていつている。ある時から感じ始めたことです。

そこは縄文時代でした。さっきの言い方をすれば、縄文人の魂も彼に乗り移ったのではないかと。

彼は、世界 20 か国以上で作品を作り続けて来ています。世界各地の公募展に次々に応募し、採用されて現地で作品を作り、その土地に設置されているのです。

例えばロシアでもウクライナでも、中東地域（トルコ、ドバイ）でも、もちろんフランスでもアメリカでも、彼は作り続けてきています。何がすごいのか。ロシアとウクライナが戦い、アメリカと中東イランが戦っている中で、彼の作品はなぜどこにでも受け入れられているのか。

私に言わせれば、宗教を越えた人類としての根源的価値がそこにあるということ。それは何なのか。それこそが縄文的世界ではないか。縄文時代は 1 万年以上続いたと言われます。この戦争ばかりしている現代社会から見れば、驚異的な長さです。キリストが生まれてから 2026 年、どれだけの人々が戦いによって殺されて来たのか。

縄文時代には、人を殺す目的の道具がなかったとか。つまり戦争をしない人々だったのです。その時代、日本列島で 20 万～25 万人位が住んでいたそうですが、一番の重要な課題は何だったのだろう。おそらく数百人単位で一族が生活していたのですが、子孫を残すという営みではないか。

戦争はなくても、子どもが生まれなくなったら、その一族は絶滅してしまいます。妊娠は安易にできたとしても、出産に至るまでが大変。今の文明社会のように医学なんて存在しません。様々な病に冒されていたことでしょう。そこで考え出されたのが土偶だと思うのです。母親に災いが来ないように、母親の身代わりとなる人形を作って、すべての負の災いを背負ってもらい破戒して埋める。言わばいけにえみたいなもの。つまり、土偶には生命の誕生と循環への強い強い願いがこめられているのです。

「絶滅危惧種」と聞くと、私達は一瞬緊張して構えて聞こうとします。生存本能はだれにでもあるのですが、人類でもネアンデルタール人などは途絶えています。縄文時代にも多くの一族が様々な理由で途絶えたことでしょう。どういう気持ちでその時をむかえるのでしょうか。現代の人類も、原爆を戦争に使い始めれば、絶滅するだろうと言われていました。

性についての価値観も、文明社会になって快樂的なものに変質していきましたが、縄文時代は、動物たちと同じように、性＝生の世界で営まれていたことでしょう。

ここで田中等彫刻にまた話をもどします。縄文時代の土偶のように、彼の彫刻は、根源的な、生＝性の時代の感性を呼び起こすエネルギーを五感で感じ取れる世界に到達しているのではないかと感じるのです。

子供たちの生きる感性を目覚めさせ、豊かなものとするために、今までも石井記念友愛社の保育園等の庭先に作ってもらい設置して来ましたが、新たな夢を描いています。

石井記念明倫保育園を改築することを機に、「友愛の森」構想を描きました。地域をまきこんだ、年令障がいの有無を越えた共生社会の実現です。この第二段階として、この「田中等彫刻」を魂として核にすえられないものか。世界平和を渴望するストーンサークルともなります。その思いを以下の 3 点にまとめてみました。

①田中等彫刻は、ロシア、ウクライナ、アメリカを初め、世界 20 か国以上に設置され、世界の人々に、生命の胎動と循環を予感させるような根源的希望を与え続けている。それは地域の歴史や価値観をも超越する、人類の原初的形＝芸術である。彼の出生地である高鍋に田中等彫刻公園を作ることで、その縄文的感性のメッカとし、世界平和を願う象徴とする。

（日本の縄文時代は、人を殺す道具を持たず、戦争をせず、1 万年以上続いた。）

②高鍋の地には、縄文時代からの数千年の歴史と文化と魂が眠っている。中世以降では、土持、伊東、島津、秋月と、その支配者が変わってきており、多くの戦いを重ねてきている。田中等の感性はそれ

らの長い歴史と文化を体現しており、彼の作品をストーンサークルのように並べることで、先人たちの魂を慰撫し、感謝する石塔とする。また、未来に生きる子供たちが、日常的に触れて遊ぶことで、その感性を引き継いでいく。

③田中等の業績を顕彰し、彼の育った明倫文化発祥の地に、彼の作品を並べることで、その歴史と文化を具現化する感性をみんなで共有し、地域の宝として誇りとする。そして未来を担う子供たちへ、五感を養う芸術としてプレゼントする。さらに、地域の人々の心を癒す、鎮守の森公園としても整備する。

具体的には、現在の石井記念明倫保育園の園庭内に7点の彫刻を円形に並べます。現在高鍋町立美術館敷地の内に放置してあった2点を持って来てあり、あと5点の制作が必要です。1点300万円～500万円はかかりますので、簡単ではありません。彼ももう70歳後半となっており、1年1点のペースでないと制作は無理でしょう。5か年計画です。問題は、これは福祉施設ではありませんので、石井記念友愛社で出資することも寄付を募ることもできないということ。有志を組織して、個人や企業に支援をお願いするという方法になるでしょう。

高鍋駅前には、巨大な田中等彫刻が2023年に設置されています。題は「MOON DANCE」。寄贈者は「高鍋町観光協会」となっています。これは高鍋町としては、画期的な取り組みでした。しかし、これを一つの制作イベントとして終わらせてはもったいないことです。私に言わせれば物語の始まりを象徴する一つのシンボルにすぎないのです。これをギョウザだという人もいます。もしそうだったら、一つの看板でしかありません。1000万円もかけて一つの看板ではもったいないことです。

私は、石井十次の「縄の帯」のエピソードを象徴すると捉えました。しかし、この頃は、もっと深い価値が秘められていると感じ取っています。つまりイザナギとイザナミの「まぐわい」なのです。縄文から日本神話への大手門なのです。神話の里宮崎の記念碑でもあるのでしょう。物語の始まりなのです。ちなみに、現在、明倫保育園内に設置してある2点は、イザナギとイザナミの象徴的姿だと、内心感じています。

皆様、どなたか出資される方はおられませんか。私は次の世代の人々への最高のプレゼントになると思っています。天国へはお金は持って行けません。出資を申し出られたある人は銘板へ次の世代へのメッセージを刻みたいと言っておられます。もし、その言葉が石とともに100年200年と残るとすれば、名誉なこと。石井十次が茶臼原憲法を大理石に刻んで静養館の壁に埋め込んだ思いに近いのかもしれない。

田中等彫刻公園イメージ図



田中等彫刻公園特徴

- ・ 7点の彫刻を園庭にサークル状に並べた石の杜とする（2点はすでに設置）。
- ・ 1年1点のペースで設置し、7個の彫刻のストーンサークルが5年で完成。
- ・ 作品は、世界の人々を魅了する人類の原初的形を有し、世界平和の象徴となる。
- ・ 田中等彫刻は、縄文的感性によっても生み出され、戦争のない平和社会を彷彿させる。
- ・ 縄文からの数千年の歴史と文化を体現し、先人たちの魂を慰撫し感謝する石塔群とする。
- ・ 子ども達が触れ合うことで、歴史と文化の感性を呼び起こし、未来に希望を引き継ぐ。
- ・ 周囲を鎮守の森とし、神楽や踊りを奉納し天に畏敬・感謝し、人々の魂を癒す。

2026・5月5日

高鍋町 友愛の森 設置 2025年9月19日

